Takashima Toujyu Kai

会報

高島藤樹会

No.7
2015.1.15

（題字は、竹脇曇卿先生によるものです）

発行
NPO法人 高島藤樹会
〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740(32)4156

近江聖人と北京の聖者
ー藤樹先生と清水安三先生ー

松本　孝太郎

二〇〇九年（平成二十一年）、孔子学院の世界大会が北京で開かれた。その機会に陳経林中学を桜美林大学北京事務所の関さん（通訳）と二人で訪ねた。この学校の前身は戦前、安三先生が大変なご苦労で建てられた崇貞女学校だからである。校門を入ると安三先生の銅像が私たちを迎えて下さいました。この銅像の建設については、反日運動が激しかった時で種々の議論のすえ建設が決まったとのこと。玄関を入りエレベーターで最上階の校長室に案内された。校長室の壁面には清水安三先生ご夫妻の写真や、安三先生が中国の貧しい子女の為に非常なご苦労をされて建てられた当時の崇貞女学校の写真などが展示され、また先生の著書も書棚にありました。私は校長室の雰囲気から、今も安三先生が中国人子女に教育された教育方針が受け継がれていることに感銘を受けました。

陳経林中学の校門の前で

昭和二十年、清水先生が非常な苦労をされ貧しい中国人・韓国人子女のために建設された崇貞学園は、終戦と同時に北京政府に接収され先生方は即刻退去を命じられました。その後学校は北京第四女子中学・朝陽中学・陳経林中学となりましたが、校長室で感じたように今も崇貞学園時代の教育理想が引き継がれていることに感銘を受け、安三先生の偉大な教育理想を感じました。

清水安三先生の銅像の前で

安三先生の著書『石ころの生涯』で崇貞学園はいろいろな理想を持っているが、その一つは藤樹書院のような学園にしたいことだ、と述べられています。

安三先生と藤樹先生の出会いは先生の著書『史的中江藤樹』の中で、「明治三十年九月二十五日の藤樹先生二百五十年祭に当時六歳の先生が村長だった叔父と列席したのがきっかけです。」とあります。その後、先生は「私ぐらい藤樹さんを崇拝し、藤樹さんを真似んとして生涯を生きたものはなかろう。先年新聞や雑誌に『北京の聖者』と称せられたことがある。私は自ら自分が聖者では絶対的にあらざることを知っていたが、藤樹が生前に近江聖人と呼ばれていたことを思い出して、仮にも誤ってでも『北京の聖者』と呼ばれたので、實を言うと何とも言うに言われぬ感を抱いたのであった。」と書かれています。

校長室の掲示板写真の前で

安三先生は、藤樹を崇拝するのみでなく、藤樹を研究することがとっても好きであると述べておられるが、それは先生の何冊も出された中江藤樹の研究書を読むとよくわかります。

高島藤樹会活動の紹介

「中江藤樹・心のセミナー」三月映画会開催のご案内

石田弘子

■会員以外の皆様も、どうぞ■

平成十七年六月に高島藤樹会設立、八月に「第一回心のセミナー」を開催、〝**藤樹教育の五十年を振り返って**〟と題して講演会・シンポジウムが行われ、遠くは三重県や大阪方面から多くの参加がありました。あれから毎年実施し十年目を迎える今年、地元の皆さん、とりわけ南北地域（高島・マキノ）の方々に藤樹さんをもっと身近に知っていただきたいと『**近江聖人・中江藤樹**』の映画鑑賞会を計画致しました。三月に予定しております。

映画に出てくる藤樹先生の言葉　〝**致良知（良知に致る）**〟人は誰でも生まれながらに美しい心（良知）を持っている。その心をけがさずにしておくことが大切である。　〝**五事を正す：貌言視聴思（ぼうげんしちょうし）**〟和やかな顔つきで人と接し、思いやりのある言葉で話しかけ、澄んだ目で物事を見つめ、耳を傾けて人の話を聴き、まごころを込めて相手のことを思う。

藤樹さんだけでなく、共に生きた人々と時代がみごとに再現されています。

時代を駆け、不屈の命が燃え上がる。自らの信念を貫き、今日に蘇る熱き心。知られざる中江藤樹の青春―ほとばしる情熱。

是非ご鑑賞をお待ちしております。いずれの会場も入場無料です。

◎マキノ会場
・日時：三月七日（土）
十三時開場、十三時三十分上映
・会場：土に学ぶ里研修センター

◎高島会場
・日時：三月八日（日）
十三時開場、十三時三十分上映
・会場：高島公民館アイリッシュパーク

※※※※※※※※※※※※※※※

『藤樹紙芝居』の紹介①

二〇〇七年、藤樹先生生誕四〇〇年祭実行委員会の依頼を受け、教材委員会はその記念事業の一つとして紙芝居の制作に取り組みました。この年度に、手作りで『子どものころの藤樹さん』と『車が田に落ちた』の二巻が完成しました。

その後も、毎年二巻ずつぐらい作成し、今年度で十八巻が揃う予定です。

これらの紙芝居は、主に市内の小学校・園に配付され、子どもたちの学習教材として利用されるほか、老人会や人権学習会、子ども会でも活用されています。

そうした中、過日の理事会において「藤樹紙芝居を実際見たことがない。利用されているのだろうか。同様の思いを持つ会員さんも多いのではないだろうか。会報で藤樹紙芝居の紹介を連載していけばいいのでは……」との意見があり、他の理事からの賛同もありました。

そこで、今回から一巻ずつ紹介していきますので、ご覧ください。（H・M）

『子どものころの藤樹さん』

（解説）

中江藤樹先生は、今から四〇〇年ほど前の一六〇八年に生まれた江戸時代初期の儒学者です。近江の国（今の滋賀県）で誕生しながら、九歳で両親と別れて武士である祖父に連れられ、鳥取県の米子、続いて、愛媛県の大洲へ行きました。晩年、再び郷里にもどり、多くの優れた門人を育てました。また、村落の教師として、地域、近隣の人々にも尊敬され、大きな感化を与えました。米子へ行ってから、あるいは、大洲に移ってからの軌跡や活躍については、たくさん伝えられていますが、郷里小川村における幼少年時代の伝え話はあまりありません。

しかし、この度、藤樹紙芝居を制作するに当たって、幼児や小学校低・中学年に親しめる子ども時代の藤樹像を、是非描きたいと考えて取り組みました。伝えられる藤樹幼少年時代には、次のような姿がありました。

『落ち着いていて、少々のことでは動じなかった』
『正義感が強く、誠実に行動した』
『礼儀作法が優れていた』
『幼いころから、物覚えが大変良かった。』

これらの藤樹少年像を織り込んで、伝え話を生かす形で、子どもが大好きな紙芝居として構想を練りました。

中心テーマは一つに絞らず、家庭生活と家族愛、あるいは地域の人達とのふれあいを中心にその中で成長する幼き日の「藤樹さん」を描きました。

豊かな自然、温かな家庭生活や家族、地域の人々とのふれあいの中で育つ「藤樹さん」の幼少年時代、その姿は四〇〇年を経た現代においても、大切にされている子育ての原点ではないかと思われます。紙芝居を演じていただく方には、それらを伝えていただくことを願っております。

（紙芝居）

①ここは、今から四〇〇年ほど昔の近江の国（滋賀県）小川村。村には、いくすじもの小川があり、一年中清らかな水が流れている村です。小川には、めだかやふながすーいすい。

道や野原には、きれいな花が咲いています。おや、空にはひばりも鳴いているよ。

中江藤樹先生は、このような小川村で生まれて、すくすくと大きくなりました。藤樹先生の名前は、「与右衛門」と言いましたが、先生の家には、大きな藤の木がおいしげっていたので、大人になってからは、「藤樹先生」と、呼ばれるようになりました。

②与右衛門さんの家は、お父さん、お母さん、そして、妹、葉さんの四人で暮らしています。お父さんたちは、米作りや畑仕事をしています。

③**与**「お父さん、お母さん、おはようございます。」

母「おはよう。与右衛門。今日も元気にごあいさつができましたね。」

父「与右衛門、今日から、いよいよ田植えを始めるよ。とても忙しくなるから、お葉といっしょに手伝いをしておくれ。」

与「はい、分かりました。」

母「おむすびをこしらえて、田んぼまでもってきてくださいね。」

与「はい、分かりました。」

父「おむすびを運んだら、苗くばりを手伝っておくれ。」

与「はい。」

母「お葉と二人で、なかよくやりなさいね。」

与「はーい。」

④与右衛門さんが、葉ちゃんを連れて田んぼに行くと、近所のおばさんが、手伝いにきていました。

与「おばさん、こんにちは。」

おばさん「あれっ、与右衛門ちゃんとお葉ちゃん、こんにちは。手伝いかい。えらいね。」

与「お父さん、お母さん、おばさん、お疲れさまです。お弁当を、作って来ました。」

葉「おにぎりをいっぱい持って来たよ。」

葉ちゃんも、にこにことして、うれしそうです。

母「ありがとう。」

父「ごくろうさん。さあ、次の仕事を手伝っておくれ。」

与・葉「はーい。」

二人は元気に苗くばりを始めました。

⑤**父**「お日様が、真上だね。そろそろお昼にしよう。さあ、みんなでいっしょにお弁当をいただこうか。」

葉「わーい、ここで食べるの？」

母「そうですよ。さあ、早く食べるしたくをしましょうね。」

みんなは、むしろを広げました。

与「いただきまーす。……モグモグ、ゴクリ……わぁ、おいしい。みんなで、お弁当を食べるととってもおいしいですね。」

葉「お外で、みんなと食べるのは、楽しいね。」

おばさん「与右衛門ちゃんとお葉ちゃんは、いつも仲良し。感心だねえ。」

母「ほら見てごらんなさい。かえるもお前たちと同じように仲良くしていますよ。」

葉「ほんとだ！。お兄ちゃん、見て。」

与「あーっ、仲良く泳いでいる。楽しそうだな。」

⑥夕方、田植えを終わって、みんなでごはんを食べています。

父「与右衛門、ごはんはおいしいか？」

与「はい、とてもおいしいです。」

父「いいかい、与右衛門。今日、みんなで田植えをしただろう。あの小さないねの苗から、このごはんになるお米がとれるんだよ。知っているかい？」

与「はい。」

父「このごはんになるまでに、一年近くの時間がかかるんだよ。」

お父さんが、お米の話を始めました。

⑦**父**「お米を作るために、とても大事なものが、たくさんあるんだよ。まず、田んぼの土、お日様の光、たくさんのきれいな水。そして、おいしいお米を作るために大切なのは、やわらかく土を耕す、草を取る、肥料をまく。たんぼに水を入れたり、水を止めたりなど、たくさんの仕事がある。毎日、朝早くから夕方暗くなるまで、働き通して、育てるんだ。」

与「お父さん、そんなにたくさんの仕事があるとは、知りませんでした。」

父「そして、ようやく秋になると、お米の取り入れができるんだよ。種まきから始めて、雨の日も、風の日も、暑い日も、毎日毎日、人の世話と、お日様や水などの自然の恵みをうけて、このように、おいしいごはんがいただけるようになるんだ。」

与「お父さん、よく分かりました。」

⑧**与**「いつも、お父さんはごはんがこぼれた時、拾って食べなさいと言われますね。そのわけが、よく分りました。」

父「そうだよ。だから、一粒のごはんも、そまつにしたり、捨てたりしてはいけないよ。感謝して、いただこうね。」

与右衛門さんと葉ちゃんは、大きな声で「はーい」と返事をしました。お父さんの話を、目を輝かせて聞いていた与右衛門さんは、「これからは、もっと勉強して、いろいろのことを知りたい」と、思いました。

⑨ある日、与右衛門さんが道を歩いていると、遊んでいた男の子たちの一人が、呼び止めました。

男の子「おーい、与右衛門ちゃん。おもしろいよ、見てごらん。」

与「どうしたの？」

男の子「かめを捕まえたんだ。ほら、ごらん。背中をたたくと、頭や足がへっこむんだ。」

男の子は、かめのこうらを、棒でコンコンとたたきました。

⑩かめは、出していた頭や足を、キュッと、引っ込めました。

男の子たち「わはっはっはー、おもしろいだろう。」

与「あーっ、かわいそう。」

男の子たちは、おもしろそうに大声で笑いましたが、与右衛門さんは、かけよって、かめをそっと抱き上げました。

⑪**与**「このかめを、逃がしてやろうよ。」

男の子「いやだよ。せっかく捕まえて遊んでいるんだから。」

与「いたずらするのは、やめよう。かわいそうだ。みんなだって、たたかれたら痛いし、いやだろう。」

男「うん。それは、いやだよ。」

与「じゃあ、このかめ、逃がしてやってもいいね。」

みんな「うーん、どうしよう。……仕方がないな。いいよ。与右衛門ちゃん。」

男の子「与右衛門ちゃんって、とてもやさしいんだね。」

与右衛門さんは、かめを川の土手に、そっと放しました。

与「かめちゃん。さあ、安全な所へ行って、遊ぶんだよ。」

⑫与右衛門さんが、九歳になった春のことです。遠い米子のお殿様につかえているおじいさんが、ふるさとの小川村に帰ってきました。おじいさんは、まごの与右衛門さんが、しっかりした子どもに育っていることに驚きました。

おじいさんは、お父さんとお母さんにこんなことを言いました。

おじいさん「与右衛門がしっかりした子になって、わしはとてもうれしく思うぞ。これからが楽しみだ。そこでだ、与右衛門を米子へ連れて行き、勉強させたいが、どうであろうか。」

お父さんとお母さんは、とても驚きました。おじいさんは、与右衛門さんにもすすめました。

おじいさん

「与右衛門、米子へ行って、もっと勉強をし、りっぱなさむらいにならないか。」

与右衛門さんは、いっぱい勉強がしたかったので、米子に行きたいと思いました。

与「はい。私は勉強をしたいと思います。米子に行きたいです。」

⑬**父**「与右衛門は、行って勉強をしたいと答えたが、大丈夫だろうか。まだ、あんなに小さいのに、かわいそうな気がするな。」

母「ええ、私も心配でたまりません。でも、おじいさんが言われるように、しっかり勉強することは大切だと思います。与右衛門は行きたがっています。あの子は、きっとがんばってくれますよ。」

お父さんとお母さんは、まだ小さい与右衛門と別れるのは、とてもつらくさびしいと思いました。でも、きっとりっぱな人になってくれると信じて、米子へ行かせることにしました。

⑭出発の日の朝になりました。

与「お父さん、お母さん、これからおじいさんと米子に行きます。そして、いっしょうけんめい勉強します。どうぞ、元気でお過ごしください。」

父「米子では、皆さんを先生だと思い、しっかり勉強しなさい。」

母「りっぱな人になれるよう、がんばりなさい。体を大切にしなさいね。」

与「はい。お父さん、お母さん、元気にお過ごしください。

では、行ってまいります。」

お母さんの目から、いっぱい涙があふれていました。

⑮長い旅をして、ようやく着いた米子は、にぎやかな町でお城がありました。おばあさんは、たいへんやさしい人で、与右衛門さんが来たことを、心から喜んでくれました。与右衛門さんは、勉強が楽しくてたまらず、いっしょうけんめい習いました。一年もたたないうちに、手紙を書いたり、むずかしい本をを読んだりできるようになりました。

米子で、一年ほど過ごしてから、今度は、大洲（今の愛媛県）に移り住みました。与右衛門さんは、大洲に行ってからも、人の何十倍も勉強しました。学問だけでなく、正しい行いができる人になりたいと考え、ますます勉強にせいを出しました。

そして、中江藤樹先生は、『近江聖人』とたたえられ、今も人々に親しまれています。

◎二作目以降の作品です

二　「車が田に落ちた」
三　「馬方又左衛門」
四　「あかぎれこうやくの話」
五　「追いはぎと先生」
六　「大野了佐を教える」
七　「そばやのかんばん」
八　「うそはつけぬ」
九　「熊沢蕃山の入門」
十　「脱藩の道」
十一　「小川村のくらし」
十二　「遺徳を守る人たち」
十三　「久子夫人と先生」
十四　「志を立てる」
十五　「賊と戦う」
十六　「毎朝かゆを炊くお母さん」（『鑑草』より）
十七　「孟子とお母さん」（『鑑草』より）
十八　「竹生島での出会い」

ひじりの声

上田　藤市郎

藤樹書院では、新年一月十一日の講書始めで「孝経」が拝誦される。その内容は、指導者たる者に、誓って徳を実践することを求めている。指導者の率先実行が末端の庶民に波及し、徳治政治が実現するとしている。藤樹先生を含めて江戸時代の武士階級は約七％で、まさに指導者だったから、責任ある自覚が求められたであろう。このような内容が書かれてあることは時代を超えて、中国、日本でもそのような指導者が少ないからこそ求められていたのであろう。現代日本の政治スキャンダルに見るように、国、地方を問わず、政治家が、金銭、権力、地位に心を奪われ、失脚する例が後を絶たない。また事実が露見した際の、弁解の醜さも甚だしいものがある。選挙運動の際の平身低頭ぶりと、当選後の傲慢不遜の差に驚く。孝経では、庶民は指導者を選べなかったので、庶民は指導者に服するものとしている。現代民主主義社会では、この指導者を選ぶのが有権者となったので、有権者が選出責任を問われるという現実がある。有権者の仁徳、正義感、人間性、清廉、謙遜、見識の豊かさが社会を創造していくのである。

寄稿　会員のひろば

「私の藤樹先生との出会い」

古谷　芳實

平成十年、商工会の人事交流により朽木村商工会より安曇川町商工会に異動になりました。

安曇川町商工会では商工会青年部を四十歳で卒業した後の組織として良知会があり、その事務局を担当することになったのが藤樹先生との出会いであります。

平成十一年には童門冬二先生の小説「中江藤樹」が出版され、安曇川町と大洲市とで友好提携が締結される年でもあり、良知会では「藤樹先生とまちづくり」を活動テーマとし、藤樹先生に関する研修会、大洲市への交流研修へも参加させていただきました。

大洲市では藤樹先生が取り持つ縁と諸先輩・諸団体の友好の歴史の積み重ねのおかげで心温まるおもてなしをいただきましたことが思い起こされます。

平成十八年度に商工会が合併し、高島市商工会になったのを機会に良知会は解散されましたが、事務局を担当させていただきました八年間、大変貴重な体験をさせていただきました。

その後は、高島藤樹会が開催する研修会等に参加させていただき、藤樹先生の教えの深さを実感している今日です。

熊沢蕃山等の識者だけでなく、土地の人々がきつい仕事の後、先生の講義を聞き元気になって帰っていく姿を想像する時、功名や名誉のためでもなく、利益のためでもなく、身を賭して教える姿はまさに聖人と呼ばれるにふさわしく、私たち高島市民の大きな誇りであります。藤樹先生の教えを現代に置き換えて一つでも実行したいと思います。

「藤樹人間学学習会」に寄せていただき

保木　隆

先日読んだ雑誌に、当時二十三歳だった井山裕太さんが棋界初の六冠王になられた終局後、決して対戦相手の張栩棋聖の気持ちに配慮し、努めて喜びを表さないようされていたと記されていました。

その井山さんの態度について、「自分には喜びであっても、相手には悲しみであることを若き天才はよく分かっているのだ」とも。

こういう精神は、囲碁のみではなく将棋や柔道などにも共通するものです。切磋琢磨し、勝負の火花を散らせてきた相手におもいやりをなにげなく示せることは人としての「道」なのであろう。

「藤樹人間学学習会」に、お声をかけていただき約一年半、毎月、『翁問答』の難解な文章に辟易としながらも、私が何とか継続できているのは、先達の皆様が築いて来られた学習会の親しみの雰囲気と新参者へのさりげないおもいやりのおかげと思っております。

『翁問答』冒頭の「至徳要道」の言葉、天下に二つと無い霊宝がわれわれ人間の身にはあると書かれています。私の力ではとてもまだ理解の域には届かないものですが、冒頭で紹介した囲碁界の一人の尊敬、友愛の行為にも通じるものを感じておりました。

また、『翁問答』の五倫の道のくだりなど、今少し早く、深く接していたらと、昨夏に旅立った父に詫びている自分です。

大洲小の藤樹少年像
（平成14年6月保木撮影）

「私と藤樹先生との出会い」

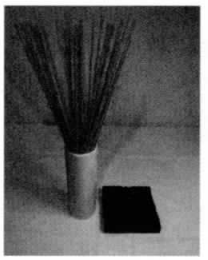
深川　澄雄

私と藤樹先生との最初の出逢いは、安曇川駅前の像との出逢いでした。その当時はこの人物がどういう人物かは知るよしもありませんでした。

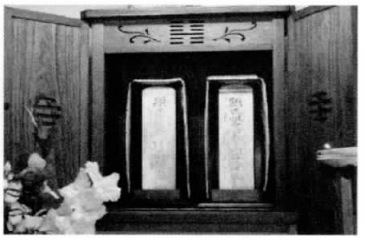
そんな私が、二〇〇五年旧安曇川町で製作された映画「中江藤樹」にエキストラで参加させていただき、また、二〇〇八年高島市市民劇「藤の樹と風と―中江藤樹物語―」に役者として出させていただき、それらを機に陽明園、藤樹記念館、藤樹書院を訪問したり藤樹先生の書物に触れることにより、だんだん藤樹ワールドへ入り込むようになっていきました。

それらの中で気がついた事をお話しさせていただきたいと思います。

藤樹記念館をたずねると、展示物の一つに筮竹と算木が有ります。また、藤樹先生の書物の「翁問答」に「諸侯卿大夫の第一に守りおこなひてよき事は、謙の一字なり」、現代に言い換えると「リーダーが第一に守るべきことは『謙』である」と、有ります。



また、藤樹書院内の祭壇中央には藤樹先生ご夫妻の神主（仏教で言う位牌）が神龕（しんがん）内に収められています。その神龕の欄間に易卦の『謙』が刻まれています。藤樹書院の解説では「門弟らが愛敬の心を込めて刻んだもの」と記載があります。いずれも易経を引用されております（意味は易経の「地山謙」を参照してください）。



この卦を拝見致しますと藤樹先生が親を大事にされていたかをうかがい知ることが出来ます。（私の卦の読み取りです）それで、神龕にもこの卦を使われたのかなと思います。「親孝行したい時に親はなし」

シリーズ④「伝え継ぐ藤樹先生」

藤樹先生の教えを幼児教育に

藤波こども園 園長　馬場　惠美子

藤波こども園は、平成二十五年より幼稚園と保育園の機能をあわせもつ園として、新しい園舎で再スタートしました。

前身の藤波幼稚園は、青柳小学校区の地域の方や青柳仏教会の支援をえて、昭和三十五年に開設されました。

創始者の松本義懿先生は、長年藤樹先生の研究を続けてこられた教育者です。園舎は、藤樹先生の研究者の合宿所を譲り受けたもので、園名は藤樹先生の「藤」を戴きました。藤樹先生ゆかりの地で、開設当初から藤樹先生の教えを幼児教育の中心に据え、保育・教育を推進してきています。

〝いつもにこにこ　やさしいことば　みんななかよし　藤波の子〟

これは、藤樹先生の教え「五事を正す」を子どもたちにもわかるようにしたものです。教職員も一人ひとりの思いに寄り添いながら、愛敬の心で子どもたちとかかわっています。

年長児（5歳児）になると、年に何回か書院に参拝します。九月二十五日の儒式祭典の前や卒園式の前などの節目に、書院に上がらせていただきお参りします。

お参りのあとに松本孝太郎先生から孝経の一節「身体髪膚これを父母に受けたり　敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」「己の欲せざる所は人に施すこと勿れ」の読み方と意味を教えていただきます。子どもたちは、自分の生活に照らしあわせて考え、友だちとのかかわり方について学んでいます。あらたまった雰囲気のある書院でお話を聞くことは、子どもたちにとってとてもよい体験となっています。

卒園式には、頌徳歌を歌い、教えていただいた孝経の一節を暗誦しています。

第三十一回　藤樹先生書道展開催される

「藤樹先生の御聖徳を敬慕し、書の上達を祈念して」、昨年十月二十一～二十六日まで、藤樹の里文化芸術会館で開催されました。藤樹先生献書会の主催で、「委嘱出品者」「無鑑査」「一般」には二百四十六点、また「小・中学生」の部門には実に三千三百九点の出品があったそうで、その展示の壮観さには圧倒されました。

出品課題は、開催要項に示された藤樹先生のことばの中から選ぶことになっています。例えば「孝徳」「明明徳」「白日晴天」「先致其良知」「孝在混沌乃中」「霞簇四山和氣新」「思い出は學びし本の心より　千里を通ふ誠忘るな」「廉直かならず財をうしなわず」……等々です。ちなみに今年度の高島藤樹会会長賞は、中村美幸さんが受賞されました。おめでとうございます。

毎年、このように三千数百人の方々が藤樹先生の遺訓からことばを選んで制作に没頭されていることを思うと、この催しが、藤樹先生の教えを受け継ぎ広める上で大きな役割を果たしてきたといえるでしょう。（H・M）

「藤樹像を求めて」②

日野小学校の和室には「致良知」の額が掲げられているとのことで、教頭先生にその和室に案内していただきました。

その字体は、藤樹書院等でよく目にする先生直筆の「致良知」ではなく、額には「高瀬武次郎」との署名がありました。その場では、高瀬武次郎さんについてはだれも知りませんでした。ところが、たまたま今回「良知館通信」の寄稿を山本義雄さんにお願いしたところ、その原稿の中に「高瀬武次郎先生」のことが記されていました。詳しくは最後の頁をご覧ください。

ただ、どうしてこの学校にこの額が掲げられたのかは不明ですが、いずれにしても「藤樹像」「致良知の額」の存在から、日野小学校やこの地域が藤樹先生を敬ってこられたことを窺えます。

日野小学校の和室に掲げられた「致良知」の額

次に、同じ日野町内の西大路小学校に足を伸ばしました。

（次号に続きます。三田村治夫）

良知館通信②

境内の像や碑

山本 義雄

良知館の北側に藤樹先生の像がある。この石碑は京都大学教授であられた高瀬武次郎博士の自宅にあった。日本思想の研究で知られた高瀬博士は特に中江藤樹には思い入れが深く、その人柄に触れようと高瀬家には多くの弟子が出入りして、惺軒先生と呼び親しまれる。博士の死後も遺愛として妻の勝さんが大切にされ、北区鴨川の辺りに地域の精神文化向上に役立ててもらう為自宅を安楽荘と名付けて開放していたが、この石碑を旧安曇川町へ寄贈の申し入れがあり、良知館開設と同時に顕彰碑となる。藤樹書院のシンボルとして大切に後世に引き継ぎたい。

右隣に愛敬の碑がある。年譜によると先生三十五歳、常に愛敬の二字を掲げだし心体を体認しむ……とあり、孝経に「親を愛する者は人を憎まず 親を敬う者は人を侮らず」とあるように、親を愛し兄を敬う心、また赤ん坊を見て愛おしいと思う気持ちを失わず、しっかり見つめて大切にすれば人々への思いやりとなっていき聖人の心となる。愛敬は藤樹先生が講堂に掲げた言葉です。

賛助会員一覧

平成二十六年十二月現在の賛助会員（法人）は次の通りです。ご協力ありがとうございます。

《新規加入》

○有限会社 宏和商事　安曇川町下小川

○三田村印刷 株式会社　今津町今津

《既加入》

○ウェストレイクホテル可以登楼

○株式会社 大山建設

○株式会社 桑原組

○有限会社 白浜荘

○社会福祉法人 新旭みのり会

○株式会社 TADコーポレーション

○鉄屋商事 株式会社

○とも栄藤樹街道本店

○中村印刷 株式会社

○ニッケイ工業 株式会社

○有限会社 馬場塗装

○有限会社 綿庄食品店

（五十音順）

お詫びと訂正

★前号（第六号）五頁「了佐てらこや小学校」の写真一枚目と三枚目に誤りがありましたので、謹んでお詫びし訂正（差し替え）いたします。

◎一枚目の正しい写真です。

開校式で、子ども達は姿勢を正し、緊張感をもって臨んでいました。

◎三枚目の正しい写真です。

学年に応じた手本をもとに、作品作りに励んでいました。

あとがき

園や学校を見る「目」

雪の季節が訪れました。純白のきれいな雪景色と裏腹に、大雪で身動きがとれなくなって困ることも多々あります。

かつて赴任したマキノ西小学校も雪の多い所でした。ところが、前夜にどんなに積もろうとも、朝車で学校に着けば、既に駐車場や校庭内の子どもの歩く道はきれいに除雪されているのです。近くの寺久保の方々の手によるものでした。そのおひとりに丁重にお礼を述べると、『学校から遠い集落は、朝早くから長い通学路の除雪をされます。学校に近い我々は、せめて学校の中の雪ぐらい除けて当たり前ですよ。』と、サラッと返されました。

少し前、NHKのクローズアップ現代で「保育園が迷惑か」をテーマに、全国で深刻さが増す保育園に対する苦情・クレームをとり上げていました。「園児の声がうるさい」「送迎の保護者のマナーが悪い」などと。市内の学校でも「プールでの子どもの声がうるさい」「土ぼこりで困る」など、苦情は少なくないようですが…。

それでも高島では、先のマキノのように園や学校を見る「温かい目」は、まだまだ健在では…。　（H・M）